

平成31年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人富山県文化振興財団	
施 設 名	富山県利賀芸術公園	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	22,655	(千円)
	公 演 事 業	20,115 (千円)
	人 材 養 成 事 業	1,235 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	1,305 (千円)

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

富山県利賀芸術公園は、雄大な自然の中に芸術創造に適した施設群を有する唯一無二の環境を活かし、舞台芸術の創造、上演、国際交流、教育などを通して、「演劇の聖地：利賀」として注目されている。1976年以來、拠点として活動している劇団 SCOT（主宰：鈴木忠志）の作品が国際的に高く評価されていることや、多国籍の俳優との共同制作、毎夏恒例の演劇祭に海外から作品を招聘するなどの活動を通して、海外のトップレベルの演劇人との交流を深めてきた。その活動は地域だけに留まらず、常に広く世界に開かれている。

2019年度は、大きな結実として、大規模な世界的舞台芸術の祭典「シアター・オリンピックス」の開催が実現した。鈴木忠志氏が委員を務める「シアター・オリンピックス国際委員会」が目指す、芸術家が主体となって運営する場、民族・国境を超えて交流し、多様性を認識する世界的な芸術拠点として、利賀芸術公園がふさわしいと判断され、1999年以來 20年ぶりの日本開催となった。開催期間は、例年の「SCOT サマー・シーズン」より長い1か月間に及び、劇団 SCOT の作品を筆頭に 16カ国 30作品を上演、期間全体を通して国内外から約2万人の観客を動員した。少子高齢化が進む過疎の村で、大規模な質の高い国際舞台芸術祭が成功したということは、一極集中が進む日本の社会への大きな問題提起となった。地方での芸術祭等は近年活発になりつつあるが、これだけの継続性を持って世代や国境を超えて人々が出会う場として成長した例は極めて稀であり、利賀芸術公園は「文化による地方創生」の先駆ともいえる。

「シアター・オリンピックス」の期間にあわせて、毎年恒例となっている高校生夏期演劇講習会、利賀インター・ゼミ、舞台芸術鑑賞会を行った。これらは舞台芸術の魅力を発信し、次代を担う若い世代や地域の新しい観客を育成するための重要な事業として、継続的に実施しているものである。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

2013年から2018年の「SCOT サマー・シーズン」では入場料金を設定せず、観客ひとりひとりに支援金額を決めてもらう“お志制度”を実施してきたが、「シアター・オリンピックス」では、チケット料金を一律 2,000円と、海外招聘公演を観るには破格の低料金に設定した。今回の来場者は、来場経験のある「SCOT 倶楽部」の会友に比べて新規観客が全体の6割と多くを占めたことから、これまでの観客とは異なる層を開拓できたことがわかる。「シアター・オリンピックス」終了後も、「SCOT 倶楽部」登録希望者は増え、現在約7,000名にまで達している。

開催期間中の飲食スペース「グルメ館」や観劇者のための特設宿泊施設「テント村」を長期にわたって運営する人員を地元だけで確保するのはむずかしいため、求人サイト「日本仕事百貨」で運営スタッフの募集を行い、全国から52名が集まった。会期中の約1か月滞在し、利賀の魅力を知ったことでその中の数人が移住を決め、人口減少に悩む地域の問題解決としても影響があったといえる。

高校生夏期演劇講習会や利賀インター・ゼミを継続することで、地域の文化関係者とのネットワークが構築されている。舞台芸術鑑賞会は新規の観客を掘り起こす効果があり、その後の支援者になっているケースも多い。利賀芸術公園の事業を核にした連携により、将来的な地域の文化振興に繋がっている。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

<公演事業>

入場率95%を目指す。 →98%を達成。(入場者数2,349人/入場定員2,400人)

海外からの入場者数を15%にする。 →15%を達成。(海外からの入場者数362人/入場者数2,349人)

対象公演数	入場者数/入場定員	入場率	海外からの観客数(割合)
3作品 7公演	2,349人/2,400人	98%	362人 (15%)

全体の入場者数が動員目標の95%を上回ることができた。また、海外からの入場者が、ここ数年で一番多いことから、国際的な注目度が例年にも増して高かったことがわかる。

<人材養成事業>

高校生夏期演劇講習会

目標参加人数 100人 → 参加者101人(講習会88人、鑑賞会13人)で目標達成できた。

県内の、12の高校の演劇部員が参加。顧問の先生から、生徒一人一人に目が行き届く指導をしたいという要望もあり、講習会の参加者は、80人程度がよいのではないかとこの意見があるため、今後の検討課題としたい。

利賀インター・ゼミ

目標参加人数 100人

→ Aコース「研究コース」参加者：全国7大学17人

Bコース「実践コース」参加者：38人(富山大学のみ) 合計55人

目標には届かなかったが、前年、前々年と比較すると増えてきている。

本年は、シアター・オリンピックスの開催期間が約1か月と長期間であるため、AコースとBコースの開催日程を分けてより多くの人に参加してもらおうと考えた。しかし、学生や教授などが一番参加しやすい日程が8月中となり開催日程が重なったため、宿泊場所等の関係で参加人数を60人以内に絞り込まなくてはならなかった。Bコースは、参加希望者は多かったが、ワークショップの開催場所の広さや講師の指導の適正人数の関係で40人以内に絞り込んでいる。

<普及啓発事業>

(目標達成率 参加人数/目標人数)

参加人数 南砺市民鑑賞会 101人/100人 (101%)

富山県民鑑賞会 53人/100人 (53%)

予定していた『リア王』『マクベス』に、『トロイアの女』を加えた3作品で実施した。

送迎バスを用意し、初めて利賀を訪れる方にとってもアクセスが簡単になっていることで、幅広い世代が気軽に参加することができている。定員に漏れてしまった方の中には、個人で予約をして来場する方もいた。その反面、募集開始から鑑賞会当日まで1か月以上あったため、応募したものの都合が悪くなりキャンセルされる件数が1割程度あった。また、本年はシアター・オリンピックス実行委員会の南砺部会、黒部部会でそれぞれ舞台芸術鑑賞会を企画したため、参加者が分散してしまったことも目標が達成できなかった要因として考えられる。(南砺部会 2公演 参加者77人 黒部部会 2公演 参加者100人)

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

①事業期間について

すべて計画した通り、適切な期間に遂行できた。

<公演事業>

『世界の果てからこんにちは』をはじめ、屋外の劇場をメインに使うため、快適に鑑賞できる8月下旬から9月上旬の時期に公演事業を開催することが恒例である。

「シアター・オリムピクス」では9月下旬まで1か月にわたって行ったため、夏休みだけでなくシルバーウィークを利用して訪れる観客も取り込むことができた。前半の観客の口コミによって後半の予約も伸び、リピーターとして再来場する観客も見受けられた。

<人材養成事業>

高校生夏期演劇講習会と利賀インター・ゼミは、夏休み期間中に、プロとして活躍している講師から指導を受けることで、その後の演劇大会や文化祭へ向けての表現力向上に効果がある。毎年同時期に開催することで、学校側が年間予定に組み込みやすくなっている。特に2019年は、12月に高校演劇の中部大会が富山県で開催されたため、地元開催に向けて生徒のモチベーションを上げることができた。

<普及啓発事業>

舞台芸術鑑賞会は参加者の募集を7月末から行っている。例年同じスケジュールで開催しているため、参加者にとって予定が立てやすく、初日から多くの申し込みがあった。毎年楽しみにしているという方も多く、本事業が浸透していることがわかる。

②事業費について

基本的には、ほぼ当初の計画通りに執行することができた。

「シアター・オリムピクス」は複数の主催団体によって実施したため、広報費は他団体と分担し、節減することができた。削減できた分は、観客の送迎バスの借り上げ代の増加分に充てた。利賀芸術公園は、公共交通機関が1日2往復のバスだけなので、アクセスにハードルを感じる観客が多い。特に今回は、海外の観客や初めて利賀に来る方も多かったため、公演時間にあわせたバスを運行することで幅広い年齢層の観客に安心して参加してもらうことができた。主要駅から利賀芸術公園への直通バス、会場内のシャトルバスを用意したほか、観客が増え宿泊場所も例年より広範囲となったため、各宿泊場所への送迎バスを増発するなど、様々なニーズに応えることができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

<公演事業>

『サド侯爵夫人(第二幕)』『世界の果てからこんにちは』は、劇団 SCOT の代表作であることからチケット販売開始時から注目度が高く、全日程満席となった。特に、打ち上げ花火を演出の一部に取り入れた『世界の果てからこんにちは』は、自然に囲まれた利賀芸術公園の野外劇場でしか実現できない作品である。

日本では上演機会の少ないリトアニアの作品である『浄化』を上演できたことも、利賀芸術公園の国際的ネットワークの成果である。近年リトアニアの若い演劇人が、鈴木忠志氏が創出した俳優訓練法「スズキ・トレーニング・メソッド」の教育プログラムに多く参加し、その中の優秀な俳優たちが鈴木氏の演出作品に出演したことが、今回の招聘公演に繋がった。会場は「シアター・オリムピックス」にあわせて改修した岩舞台上、劇団のレパートリー作品『浄化』を野外で上演するのは初めてだったため、作品の新しい魅力を引き出すことができた。

<人材養成事業>

高校生夏期演劇講習会では、継続性を重視し、平成 30 年度と同じ講師を迎え、基礎的な演技指導やグループでの創作、課題発表を行った。また、劇団 SCOT の俳優による「スズキ・トレーニング・メソッド」の訓練や、合掌造りの劇場を見学するなど、利賀芸術公園でしか体験できないプログラムも組み込んだ。劇団 SCOT の『世界の果てからこんにちは』の鑑賞日も設け、見学した「スズキ・トレーニング・メソッド」が舞台にどのように活かされているかを実感してもらった。

利賀インター・ゼミは、例年同様、文化政策を学ぶ「研究コース」と演劇ワークショップ等を行う「実践コース」の 2 コースを実施。「シアター・オリムピックス」開催中に行うことで、観劇や様々な分野の講師によるシンポジウム聴講なども含むことができた。「研究コース」では、講義や討論会を通して、芸術と社会に関する課題に迫った。限界集落と言える地域でどのようにして大規模な国際演劇祭が成り立っているかを間近で見ってもらうことは、優れた芸術家と地元自治体、民間企業、地域住民が協働で行う文化事業の大きな成功例を学ぶ機会となった。「実践コース」は、利賀インター・ゼミでの指導経験の長い演出家に講師を依頼したことで、前年度までの内容をより深めたレベルの高いワークショップが実現した。

<普及啓発事業>

利賀芸術公園を地元の方にさらに認知してもらうため、市民・県民に限定した鑑賞会を実施している。送迎バスを用意することで、自家用車での移動がむずかしい高齢者や学生も参加しやすく、一部の日程では定員を超えるほどの多くの申し込みがあった。特に今回は「シアター・オリムピックス」の開催により、普段触れることのむずかしいギリシア、インドの作品をプログラムに含めることができた。「シアター・オリムピックス」のもう一つの会場である黒部での広報にも力を入れた結果、富山県民鑑賞会は 8 割近くが黒部市からの参加となり、富山県内の広い範囲で利賀芸術公園の認知度を高めることができた。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

<公演事業>

劇団 SCOT は、40 年以上にわたって利賀芸術公園を本拠地に創造活動を行ってきた。集団芸術にとって理想的な環境において生まれた数々の作品は、国際的に高い評価を得てきた。利賀村（現南砺市）、富山県、富山県文化振興財団は、その基盤となる環境整備を長い期間かけて鈴木忠志氏と協働で行ってきた。その成果は過疎地利賀村の住民にも大きな影響を与え、毎冬行われるそば祭りなど住民自らが立ち上げたイベントの原動力になっている。

今回の「シアター・オリンピックス」では、地元の小学生、中学生が海外の作品を鑑賞できる招待枠を設け、子供の頃から優れた舞台芸術に触れる機会を創出することができた。また、石川県の金沢 21 世紀美術館が“高校生に本物の舞台芸術を見せたい”と観劇バスツアーを企画するなど、優れた人材育成事業を行うことのできる場として、隣県からの信頼も厚い。

「シアター・オリンピックス」で国内外から多くの観客が訪れる機会に、関連企画として「グルメ館」前の特設ステージで地元団体が郷土芸能を披露。地域住民が維持してきた伝統芸能を広く知ってもらうことができた。

<人材養成事業>

高校生夏期演劇講習会では、県内の高校演劇部員に、プロの俳優による演技指導を受ける機会、世界的に評価されている演劇を鑑賞する機会を提供。本格的な指導や他校との交流は活動の刺激となり、生徒たちのモチベーションを上げ、県内高校演劇の表現力向上に貢献している。

利賀インター・ゼミは富山大学と連携して行っている企画であり、「研究コース」には富山大学をはじめ、神戸大学、九州大学、愛媛大学、静岡文化芸術大学、立教大学、金沢大学から文化政策に関わる教授や大学院生が参加した。「実践コース」には、富山大学から 2 つの演劇サークルが参加。同じ志を持った仲間同士で交流し、意見を交わした経験が、各大学での研究や学内公演の活性化に繋がっている。

<普及啓発事業>

少子高齢化が進む利賀村において、利賀芸術公園が世界規模の文化事業を発信し続けることは、地域の可能性を国内のみならず海外へも示すことに繋がり、“地域の誇り”となっている。舞台芸術鑑賞会は、利賀芸術公園をより一層身近に感じ、演劇鑑賞の経験がない方にも気軽に参加してもらうことを狙いとした事業であるが、狭義の演劇ファンをつくることが目的ではなく、文化芸術を通して“地域の誇り”を体感してもらうことが重要である。また、優れた芸術鑑賞ができる環境を維持することは、将来的に県内から新たな芸術文化が生み出される可能性にも大きく影響し、地域の文化芸術の発展に貢献しているといえる。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

<公演事業>

「演劇の聖地：利賀」という国際的共同作業が成立する“場”や、独自の俳優訓練法を創り出した鈴木忠志氏の演劇思想を深く理解するために、鈴木氏の本拠地である利賀での「スズキ・トレーニング・メソッド」のプログラムに参加したいという海外からの要望はこれまでも多かったが、「シアター・オリンピックス」終了後は、実際の創造環境を目の当たりにした参加団体の俳優や観客として訪れた海外の演劇人からの問い合わせが増えていた。また、新聞・テレビでの報道や口コミの効果により、舞台芸術の枠を超えて多方面から注目を集めたことから、演劇ファン以外の“潜在的観客”を掘り起こすことにも繋がった。

「シアター・オリンピックス」は過去最大規模のイベントとなったが、地元の協力により、来場者の受け入れを行うことができた。利賀には宿泊場所が少なく、公共の宿泊施設や民宿だけでは対応しきれないという懸念があったが、14軒の民泊の協力を得ることができた。利賀芸術公園の事業により、新しい人材の力を取り込みながら、毎夏多くの来村者を迎えてきた経験が活かされた結果である。これまでに長い年月をかけて築いた地元との協力関係の集大成ともいえる。

<人材養成事業>

高校生夏期演劇講習会を継続して行ってきたことで、参加経験のある上級生が下級生に指導をするなど、本事業が次世代に繋がっている様子が見える。創作のレベル向上に効果をもたらすだけでなく、地元から優れた文化が発信されていることを伝えていく役割も果たしている。

利賀インター・ゼミは、継続することで関係者間の連帯を強め、ディスカッションを経て年々内容が深化している。参加した学生が、その後も継続して利賀芸術公園を訪れるようになることも多い。

<普及啓発事業>

舞台芸術鑑賞会には、首都圏に比べて舞台芸術に触れる機会の少ない地元の観客に、質の高い作品の鑑賞機会を提供することで、観劇人口を増やし、将来的な利賀芸術公園の応援者を育成する役割がある。実際、本事業への参加をきっかけとして、会友組織「SCOT 倶楽部」に入会する方が増えるなどの効果が出ている。利賀芸術公園の活動の継続には、地元の応援が必要不可欠であり、地域との強固な繋がりを広げていく上でも重要な取り組みになっている。